

中央大学 学長杯争奪 スポーツ大会

スポーツ施設を開放し、地域市民と交流 「開かれた大学」として相互理解進む

夏の恒例行事となった中央大学学長杯争奪スポーツ大会が7月6、13の両日、多摩キャンパスで開かれた。近隣の多摩地域（八王子、日野、多摩、町田、稲城、立川、府中、国立の8市）の市民とスポーツを通じて大学との交流を深めようと、1991年から毎年開催し、今年は18回目。バレーボール、バスケットボール、ソフトテニス、卓球、軟式野球、サッカーの6種目に126チーム約2000人の小中学生とお母さん方が熱戦を繰り広げたなかで、参加者に大学と地域のつながりについて聞いた。



学生記者取材班

7月6日

第一体育館で

「中央大学をぜひ楽しんで」と

永井学長

6日午前9時から第一体育館で行われた開会式。大会会長の永井和之学長が挨拶にたった。「おはようございます。どうですか、調子は？」と選手たちに語りかけるように話し、「思い出になるように全力を尽くして試合に臨んでください」と選手たちを激励した。

「早く負けてしまった人たちは、カブトムシが中央大学内にいるので、ぜひ探してみてください。カブトムシがどこにいるかという場所は教えないけれども、負けたとしても中央大学をぜひ楽しんでください」と、永井学長は樹木に囲まれ環境豊かな多摩キャンパスをユーモアを交えて紹介しながら、あいさつ。

選手宣誓「悔いのない試合を」

続いて野崎武尊さん（日野市立大坂上中学校）が最前列に進み出て、右手を掲げて「日頃の成果を生かし、悔いのない試合をして、正々堂々戦

「抜くことを誓います」と選手宣誓をした。

応援団チアリーディング部の演技、それにつづく音楽研究会吹奏楽部の演奏が会場を盛り上げた。

優勝カップを学校へ、とバスケット選手

記者の武田は、試合を前にした選手たちに突撃取材。中学女子バスケットボールに参加する石森香澄さん（町田市立薬師中学3年）は、「町田代表なので勝とうと思っっています」と意気込む。また、「中学最後



開会式であいさつする永井学長

スタンドは応援にかけつけた選手のご両親や兄弟姉妹でいっぱい。その人たちにも聞いた。

佐藤薫子さん（立川市）は、「この大会は子供たちにはいろんなチャンスです。バレーボールとか、他の種目の生徒が頑張っているのが見られるし、大学ってこんなところなんだっていうのも見られるし、あと、親としては子供がもしかしら中央大学に行きたいと思うかもしれないですね」と笑う。

の大会でもあるので、この大会で後輩たちに引き継げたらと思っっています」と力強く語ってくれた。

同じく、中学女子バスケットに参加する藤本通さん（立川市立立川第七中学校）も、「優勝をねらっています。カップをもらって、学校に持って帰って、そして初めて学校の舞台上で表彰されるのが夢です」と顔を紅潮させた。

中大に行きたい、 と思うかも



選手宣誓

選手が参加するこの大会ならではの指摘をいただいた。

竹内義博さん（多摩市）は、「多摩には、こんなに立派な施設はないので、すごくいいと思います」という。また、「子供たちも大学の雰囲気があるので、ぜひどんどんこういう催しをやってほしい」と、「したい」と、スポーツだけにどまらない大学との交流拡大を要望した。

「大学で試合をやることってなかなかないので、もったいなくした大会が増えて欲しいですね」と佐藤さん。

立派な施設で、いい経験に

「こんなに広く大きい体育館で試合することがないので、いい経験になる」というのは、水田留美さん（日野市）。「普段はブロック別なので、いろんな学校と試合をできないんです。この大会はいろんな学校とやれるのもいい」という。広域8市から

「中大に行きたい、と思うかも」

「大学で試合をやることってなかなかないので、もったいなくした大会が増えて欲しいですね」と佐藤さん。

大学の雰囲気知る、よい機会

一方、初めて中央大学に来た人からは、「こんな感想を聞くことができた。（大学内には）入りづらいですね。日野市に住んでいてもなかなか足が向かないです」というのは吉成順子さん（日野市）。でも、この日は姪っ子の応援で中央大学に足を踏み入れることができた。



熱戦を繰り広げた中学女子バレー

「初めて中央大学の構内に入ったんですけど、山の上にあるから、なかなかこういう機会がないと、入らないですよ」というのは、ママさんバレーの応援にきていた「豊友クラブ代表」の山内良枝さん(日野市)。中学男子バスケの応援にきていた斉藤貴子さん(町田市)は、「町田から来たんですけど、思ったよりは近い」と感じたという。「この大会は、学校の公式試合がすべて終わった後のチャンスだし、大学の雰囲気も知ることができるので、子供たちもすごく喜んでいました」。

大学の施設開放は当然、と市民

大学が施設を開放してこのようなスポーツ大会を開いていることについて、「当然やらなきゃいけないことだと思えますよ」というのは、毎年スポーツ大会には来ているという家庭婦人バレーチーム「1、2、3クラブ」代表の山中信良さん(府中市)。山中さんは社会人向けの大学の講座を受けているという立場から、「もっと楽に参加できる講座があったらいいなと思います」という。「講座はあまりお金をとらないで、ボランティアのような感じでやってもら



試合前のストレッチに余念がない家庭婦人バレーボールチーム

えれば、参加しやすいと思う。なかなか難しいと思いますが、地域の関係をもっと深めるんだったら、そうした方がいいと思います」と語ってくれた。

大学の地域還元は歓迎、と教師

また、横田明宏さん(府中市立第一中学校教師)は、「大学と企業はもっと地域還元をすべきだと思うので、このような大会を開いている中央大学は立派だと思います。今後もやっていつて欲しいですね」と地域に施設を開放する大学を評価した。

同じく教師の立場から橋爪由香里さん(多摩市立青陵中学校教師)は、「中学生は大学に来る機会がないので、いい経験をさせてもらっている。大学生の試合を見られたら、もっと勉強になるかな」と要望も付け加えた。

炎熱の体育館内に、空調を

この日は、炎暑で、じっとしていても汗が噴き出してくる。体育館の中は直射日光は避けられるが、吹き抜ける風が欲しい。選手らは中央大学が提供したうちわが手放せず、試合の合間、ベンチに戻った選手に控

え選手が脇からうちわであおいでいる光景が目についた。

「日頃の練習の成果を100%出します。できたら120%」と、家庭婦人バレーボールに出場する「すずきクラブ」代表の鈴木春美さん(八王子市)は、力強く語りながら、額の汗をぬぐった。

府中市からママさんバレーの応援に来ていた斉藤宏子さん、吉田静子さん、小椋京子さんらが口をそろえたのは、空調設備についてだった。

「もうちょっと涼しいときに開いて欲しいと思いました。空調設備はないですよ」と。体育館には、大きな扇風機4つが設置されているが、炎暑にはほとんど効き目はない。汗を拭きふき、記者もうなずいてしまった。

7月6日 ソフトテニス、サッカー場で

天然芝の陸上競技場でサッカー

広大な多摩キャンパス内で、第一体育館からは正門をはさんで対極に位置するテニスコートとサッカー場、野球場、陸上競技場では、中学男子・



見事なヘディング。ボールは？

女子ソフトテニス、小学5、6年サッカー、同軟式野球が行われていた。陸上競技場でのサッカーの試合。灼熱の太陽の下で、緑の天然芝のフィールドを小学生たちが飛び跳ねている。若さと元気を感じながら、記者の竹下は、選手たちの動きを追った。周りから「よし行けー!!」「頑張れよ」という大きな応援の声。こちらにも負けてはいない。ギャラリーの選手の家族たちである。

「いい会場、自信もって」と

コーチ

多摩平ジュニアサッカークラブでゴールキーパーを務める勝又俊明君（日野第二小学校六年）に話を聞くことができた。
炎天下、見るだけで汗が吹き出る「長袖ユニフォーム」に身を包んでいる。

— 次の試合ですか？

「はい！」

— がんばって。暑いから脱水症状に注意してね。

「ありがとうございます！いってきます！」と元気な返答。

駆けていく先にいるのはコーチ。選手たちはコーチの指示に聞き入っている。

「せっかくいい会場に来てプレーできるんだから、常にこういうピッチを踏むんだと意識しながらやるように。まずは自信をもって」

評判上々のソフトテニス会場

ところは変わってソフトテニスの会場。こちらでは、中学生たちが優勝カップを目指して、コート場でボールを追いかけていた。

先輩の試合を応援していた町田市立町田第二中学校ソフトテニス部1

年生に話を聞いてみた。「いつもの大会とは少し違う雰囲気」、「中大の印象は、広い」、「クレイコートを普段使っているから、うれしい」などと評判は上々。部員は約50人で、男女は半々という。

いつもとは環境が違うコートでの試合に、遠足気分ではと思いきや、「先生からは、『何をしに来ているか考えよう』と話がありました」と。みんなしつかりしている。

3年生最後の試合で、意義ある



中学男子ソフトテニス

中央大学がこのスポーツ大会を企画していることについて、地域の方はどう思っているのだろうか。

府中市立府中第八中学校のソフトテニス部顧問、伊藤優子先生は、「参加費もなく、ちょうどよい練習試合の機会をもらえた、とありがたく思っています。うちは都大会を目指しているので調整を行うにはもってこい。（都大会に）出られない学校さんも、3年生最後の試合として意義があると思う」という。

「熱中症が一番怖い」と選手たちの体調を気遣っていた伊藤先生。テニスコート近くには、大学の提供で冷たい飲み物が用意されていた。



冷たい飲み物で一息つく選手たち

「ご自由にお飲みください」と表示された看板の下には、大きなポリ容器に冷えた飲み物がたっぷり。選手と応援が集まった人たちで、順番の列ができるほどだった。

7月13日

第一体育館で

「中大は頭が良い、
というイメージ」

この日も猛暑。卓球会場の第一体育館の中は、熱気のコもった試合でさらに暑くなっていた。記者の石川は、バテバテだったのに、中学生はとても元気だ。

休憩中楽しそうにお茶を飲んでいた立川市立立川第五中学校の5人の3年生は、「中大の体育館はすご



広い体育館を仕切った卓球会場

この大会は試合数が普通の大会よりも多いため、補欠の3年生や、2年生も試合に出すいい機会なのだそうだ。「大会を通して、中大のイメージが良くなってくる。有名な大学だし、将来、中大で学びたいと思う生徒も出てくるでしょう」。5、6年間ずっと大会に参加し

い！」と口々に話してくれた。大学のキャンパスに入るのは初めてだという。「中央大学は頭が良いというイメージ」という彼らに、「ぜひ中央大学へ！」と記者が勧めると「まだ大学なんて考えたことないよ！」と笑った。

「賢沢で嬉しい大会」と
卓球部顧問の先生

生徒の試合を厳しい眼差しで見つめるのは、立川市立立川第七中学校卓球部顧問の佐藤佐知典先生。このスポーツ大会について「参加費はいらない、審判をしてくれる学生は全国レベル、たくさんの参加賞をもらえる、とても賢沢で嬉しい大会です」と話す。



応援の家族と一緒に木陰で昼食

ているという佐藤先生も、ちょっとした中大ファンになってくれているようだ。

「子供が大学を知るので
嬉しい」と母親

試合を盛り上げるのは、やはり応援に来たお父さん、お母さんたちの役目だ。多摩市立鶴牧中学校2年の奈良岡蒼生君の母、佐和子さんは「大学で大会が行われることは、子供が大学という場所を知るという意味でも嬉しいことです」と話す。



さあ、試合開始だ。中学女子バスケットボール

蒼生君は前日から「早く中央大学に行ってみたい」と話していたという。大学とのつながりについてうかがうと、「中央大学でどのような催しがあるのか、地域の人はよく知らない。分かれれば見に来たいし、参加もしたい」とアドバイスをくださった。

大会運営・進行を支える
中大卓球部員

てきばきと大会を進行し、審判も務め、頼もしく動き回る中大生も記者には印象的であった。どんな気持ちで大会に参加しているのか尋ねると、卓球部で商学部金融学科1年の

伊積健太さんは「いつも大学に施設を提供してもらっている。今日は我々が大学のために働く日。みんな積極的に参加しています」と笑顔で答えてくれた。また、「中学生の卓球のプレーはまだまだ」「とても暑いにはつらつと動いていて、中学生はやっぱ元氣」など大学生のお兄さんとして中学生を見守っていた。

「力発揮できた」と

男子バスケット優勝監督

この日は、中学男子バスケットの決勝戦。優勝した多摩市立鶴牧中学校の顧問、築瀬学先生は、ベンチから立ち上がって大きな声で選手に指示を出す熱血先生だ。試合中は厳しい顔つきだったが、優勝が決まると笑顔で質問に答えてくださった。

「勝っても負けても今日の大会が最後、と生徒に言い聞かせてきました。負けてしまった地区大会で発揮できなかった力が、優勝という形で今日発揮できたのは本当によかった」と嬉しそうだった。

中大のスポーツ大会が、生徒たちの最後の良い思い出になったことが、記者もとても嬉しかった。

7月13日

硬式野球場で

「バッチコイヤ」の

元氣な掛け声

硬式野球場では、焼きつくような炎天下で軟式野球の熱戦が繰り広げられた。小学5、6年生の「バッチコイヤー！」という元氣いっぱいの掛け声と応援する保護者の声が球場全体に響いていた。

記者の伊藤は、この大会の位置づけについて、選手のお父さんやお母さんにインタビュしてみた。



すばらしい野球場に選手たちは感激

素晴らしい球場で、子供は幸せ

「こんな立派な球場でできるから子供たちはみんな大会を目指して練習している」というのは、「若葉台フレンズ」（稲城市）の選手、佐藤凌太君のご家族。どうやら中央大学の施設の評判はかなり良いらしい。他の方にインタビュしても施設のすばらしさを褒め称える声が多かった。

決勝は立川クラブ（立川市）と松中小ファイターズ（立川市）の戦い。両チームとも一進一退の攻防の末、サドンデスゲームに入り、その結果、松中小ファイターズが優勝した。

松中小ファイターズの堀田弘監督は、「素晴らしい球場で試合ができて本当に良かった。普段は河川敷球場でしかできませんから、子供たちは幸せだと思います」と感想。中央大学野球部については「高橋監督には期待しています。1部昇格を見事果たしましたしね」と高い関心を示した。

「勉強して中大に入りたい」と

小6生

選手にも話を聞いてみた。松中小



炎天下の野球決勝戦で、アツイ声援を送る家族たち

ファイターズの6年生のキャプテン、岡広大君は、お父さんが中央大学の卒業生。「球場はすごかった。迫力があつた」という広大君は、「（中央大学に）勉強して入りたいと思った」とこたえてくれた。

スポーツ大会を通じて大学と地域とのつながりは、着実に広がってきている。

学生記者取材班

竹下奈穂 || 経済学部4年 / 伊藤知広

|| 経済学部3年 / 武田朋実 || 法学部

3年 / 石川可南子 || 法学部1年